

私のこころみ

幼児の生活から取材したお話



鈴木 正子

サルビア

四才児向

サルビアの花って赤いのね。

暑い暑い夏の花ね。ぼっぼ、ぼっぼ、お日さまの下でもえてるの。

小さなあかい袋がいくつも集まって咲いてるの。サルビア、サルビア、名前もおかしい花ね。

ある日小さな坊やがサルビアのはたけに行きました。黄色い蝶々が一匹サルビアにとまっていました。

「蝶々さん、なにしてるの」

坊やが蝶々さんに聞くと蝶々さんがいいました。

「みつをあつめてるの」「みつってなあに」

「あーら、みつを知らないの。みつは甘いよ」

蝶々さんはそういつて長い細い口を赤い袋の中に入れました。

「この中にあるの。何だったら坊やもなめてみる？」

坊やが蝶々にいわれて小さなあかい袋に手をのばしました。

幼児たちは自分の知っていることや経験したことに関係のあるお話をよろこびます。そこで私は幼児に与えるお話の中に、教師のつくった幼児の生活から取材したお話を時々加えてみることをこころみてみました。

みんなで楽しく遊んだことがらなどをもとにしてつくったお話は、おもいあたるふしが多いのでとくによろこび、自分たちの生活をよく知ってくれるということで教師への親しみも増し、幼児との心の交流に役立ったような気が致します。

又こうしてほしいとおもうようなことがらを、身近な例をとりあげてお話にして与えると、案外幼児の心に自然に伝わり、生活指導の面にプラスして嬉しくおもしろいこともありました。

次にあげたものはその中のいくつかで、専門的にみたらたいへん未熟なのですが、教師のお話づくりの意味といったものをくみとっていただけたら幸いです。

そして坊やは、

「ひとつだけちようだいね」とサルビアにいつてとりました。そうして坊やはそつと赤い袋を口へもつていききました。

「どーお、甘いでしょ」と蝶々がいました。

「うん甘いね」と坊やは笑つてこつくりしました。ほんとうに、すこしだけ甘い味がしました。

「それだけね」と蝶々が坊やにいいました。

「それにさ、毒のお花もあるから、今度お花がほしい時はママか先生に聞いてからね」といいました。

「うん、いいよ」

坊やはもう花をとりませんでした。そして蝶々さんが蜜を集めるのをいつまでもいつまでもみていました。

夏休みあけのある日のことサルビアの花壇のまわりに赤い花びらがしきつめたように散っているのをみつけた私は、まもなくそのわけがわかり、おもわず苦笑してしまいました。

「この花はあまい」という、だれかの発言にしたがつて、みんなが、我も我もとためしてみた結果だったのです。

咲いている花をやたらにつんではいけないことは百も承知だったわけなのですが、知りたい欲求はきまりを破るほどに大きかったようです。私は幼児の大きな発見もみとめてやり、又花を大切にすることも知らせようというこつとで、こんなお話を思い

つきました。幼児たちは私のねがいとするとところをくみとつてくれたらしく、それからはサルビアをやたらにとることをやめ、どうしてもほしい時は許しをもとめるようになりました。

くるま君

五才児向

トンボのくるま君は窓の外からのぞきこんだ室が子どもでいっぱいなのをみておどろきました。

「毎日毎日だあれもいなかったのにどうしたんだろう」と、くるま君は、すーいすーいと高い回転窓から室の中にすべりこみました。

「あ、とんぼ」とひとりの子がみつめて指でさしました。

「あ、ほんとだ、ほんとだ」と、他の子たちもみつめて両方の手をあげました。

「くるまどんぼだよ」とその中のひとりがいいました。くるま君はびつくりしました。どうしてつて、自分の名前をもう子どもたちが知っていたからです。

くるま君は茶色の紋のついているうすい羽と、だいたい色のしっぽをできるだけのばして机のいちばんすみっこにいた女の子の頭にとまりました。

「こんにちは」そういつたつもりなのに、みんながわつと笑つてかけよつてきました。くるま君はびつくりしてつーいと、とびました。そして柱にかかっているカレンダーさんの頭にとまりました。

カレンダーの顔には25とかいてありました。

カレンダーが小さな声で「きょうからはじまったのよ。みんなま
つろくろな元気な子たちですよ」と、おしえてくれました。

「あ、そうか」くるま君にはやっとこんなな子どもがいるわけがわ
かりました。

「チークチユクチークチユク」十姉妹が箱の中でなっていました。
くるま君は「こんには」と十姉妹の金あみにとまつて声をかけ
ました。十姉妹が、

「くるま君、もう秋だねえ、外には君のお友だちがいっぱいとんで
いるだろうね」といいました。

「ああいるよ。ぎんやんま君やおにやんま君や、しおから君、ヒコ
ーキみたいにとんでいるよ。お日さまにキラキラ羽をひからせて」
と、くるま君は返事をしました。くるま君は、今度はおとなりの金
魚の鉢にいつとまりました。

金魚鉢には三匹の金魚がいました。たにしも一匹いました。
「こんには、ごぎげんいかが」

くるま君の声で金魚はおよぐのをちょっとやめました。
赤と黒と、赤白まぎった金魚との三びきです。

「おにわの池から、いまつれてこられたばかりなの。今度のうちも
なかなかいいよ。ほら子どもたちが海からとってきてくれた白い貝
がらも沈んでいるだろう。僕たちはあれで、かくれんぼをするんだ
よ」と金魚たちはじまんそうにいいました。それを聞いて、くるま
君はちょっとうらやましくなりました。

「こんどは、どこへいつてみようかな」

くるま君は又考えました。そして部屋のまんなかで本をよんでい
る坊やのところにいつてみました。

男の児はくるま君に気がつかないで本をよんでいました。そうっ
とのぞくとその本には、まんまるお月さまがいてありました。そ
して下の方に子どもをのせたロケットがとんでいました。

そしてしきりに男の子はなにかいつています。くるま君がそうっ
とその子のせなかにとまつて聞くと「ぼくもお月さままでいつてみ
たいな」といつていました。

くるま君が前にまわつて、先のとがった、真中に窓のあるロケッ
トの絵にとまると、男の児は、

「あ、くるまさんぼだ。そうだ君がつれていつてくれるといいな」
と、目をキラキラさせて大きな声でいいました。

くるま君はほんとうにヒコーキのように大きくなりたいたいとおも
いました。そうして月の世界に子どもをのせていけたらどんなにい
だろうとおもいました。くるま君はしばらくの間、大きな目玉でじ
っとお月さまをみていました。

「くるま君、くるま君、はやくおいでよ」気がつくと外でしおから
君がよんでいました。

「もう帰らなければ、みなさん、さようなら又きますね」くるま君
はいいました。

「又おいでね、仲良く遊ぼうね」子どもたちが手をふりました。く

るま君は羽をならしてすーいとびあがると、回転窓から秋の空の中に消えていきました。

八月二十五日は私たちの幼稚園の第二学期がはじまる日です。いままで静かだった幼稚園は幼児をむかえて急に活気にあふれます。幼稚園のものをすべてが、子どもたちのくるのをまっていたのですから。これは園のそんな雰囲気であらわしたくてつくったお話です。幼児たちがこれを聞いて又二学期もよろこんで登園してくれたらうれしいと思ひながら、始業まもない日に読んで聞かせました。

笑いごま

五才児向

「こままわしするものこのゆびとまれ」
けんちゃんがひとさしゆびをたててスキップをしてまわると、じゅんちゃんとげんちゃんがとまりました。三人は暖かいお日さまがいっぱいあたっているゆうぎ室の日向をみつけてまあるくなりしました。三人は持ってきたこまを、いち、にっ、さんでだしました。
みんな同じ木のこまでした。白い太いなわのようにあんだひもでまわすこまでした。

「さあ、いち、にっ、さんだよ」

三人はきりきりと木のこまにひもをまきつけました。「じゅみょうながだよ」とじゅんちゃんがいきました。じゅみょうながという

のは、いつまでも長くまわしっこの競争です。三人はきつと口を結ぶといち、にっ、さんで投げました。

三つのこまはいっしょにくるくるとひもからはなれると、キーンとまわりはじめました。

動いているのか止まっているのかわからないくらい、こまは早くまわりました。

三人はじーっと自分のこまばかりみていました。息をしないでみていると、自分もまわっているような気がしてきました。

いつまでもいつまでも見ていると、胸がきゅーんとしてきました。三人は一緒にほーっと長い息をつきました。

するとこまがかたりとゆれました。こまはそれから「かった、かった、かった」と、音をたててゆれながらまわりはじめました。

三人は急におかしくなって、わっはっはっとして笑いだしました。

「このこまは笑いごまだよね」とげんちゃんがいうと、みんな「そうだそうだ」といいました。

笑いごまはしばらく笑うと、三ついっしょにゆらゆらゆらりんところんととまりました。三人はそれを見て、「みんな、おあいこだね」ともう一度笑いました。

お正月になると子どもたちは、こままわしに熱中します。五才児ともなると私など及びもつかぬほど上手になります。それは幼児たちのころがそっくりこまにのりうつつてまわっている

るような感じですよ。

私はたのしく愉快なお話として、この話を与えてみました。子どもたちはただ意味もなく面白いお話も大好きなものです。

こおり

「みせて？」

「いや」

青いホケットのなかで

こんこんぶつかり合っているもの

「教えて？」

「いや」

まっかな手が

しっかりとおさえているもの

「みたいな、みたいな」

「こ、お、○」

何だか北風に消えちゃった

「聞こえないよ、もう一度」

「こおり」

「こおりだって」

「こおりだってさ」

(ゆっくりと二回くりかえす)
これはあや子ちゃんのおはなしです。

五才児

あや子ちゃんは朝早く幼稚園にやってきました。そしてお庭の水道のくちから、きれいなきれいなつららがさがっているのを見つけてきました。きらきらお日さまに照らされて光っています。あや子ちゃんはそうつとつららを取りました。つららは二つにかけてカッチンコーンといっぺあや子ちゃんの手のにりました。

「これはあたしの宝物よ」といっぺあや子ちゃんは、それをそうつとホケットにしまいました。

あや子ちゃんはそれからお友だちや先生の所へかけていきました。

みんな、あや子ちゃんのホケットの中で、何かがこんこん鳴っているのを聞いて、何がはいっているのか、とても知りたがりやでした。

あや子ちゃんは、はじめないしょにしておこうと思いましたが、どうとうみんなに教えてしまったのです。

きつと明日の朝はみんながこおりをみつけに早く幼稚園にやってくることでしょね。

こおりは冬の子どもにとつては大切な大切な宝物です。子どもたちはよくホケットや引き出しにしまつて大事にします。

お話をきっかけに、こおりを対象にしたいろいろな遊びがうまれ、又こおりだけでなく、霜や雪などの冬の自然に眼をむけるようになってくれたらと思ひながらこんな話をしてみました。

(群馬大学文学部附属幼稚園)